戦略的創造研究推進事業
（社会技術研究開発）
令和3年度研究開発実施報告書

ＳＤＧｓの達成に向けた共創的研究開発プログラム

シナリオ創出フェーズ

「認知症包摂型社会モデルに基づく多様な主体による

共創のシナリオ策定」

研究代表者　　内田 直樹

（医療法人すずらん会たろうクリニック

院長）

協働実施者　笠井 浩一

（福岡市保健福祉局高齢社会部認知症支援課

課長）

目次

１．研究開発プロジェクト名 2
２．研究開発実施の具体的内容 2
２‐１．目標 2
２‐２．実施内容・結果 4
２‐３．会議等の活動 19
３．研究開発成果の活用・展開に向けた状況 22
４．研究開発実施体制 22
５．研究開発実施者 23
６．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など 25
６－１．シンポジウム等 25
６－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など 25
６－３．論文発表 25
６－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） 26
６－５．新聞報道・投稿、受賞等 26
６－６．知財出願 26

１．研究開発プロジェクト名

認知症包摂型社会モデルに基づく多様な主体による共創のシナリオ策定

２．研究開発実施の具体的内容

２－１．目標

（１）目指すべき姿

日本全体で認知症当事者が増え続けている。特に大都市部では今後、高齢単身世帯の急増が予想されており、中でも、福岡市は、高齢者を含む世帯（※2015年国勢調査における「65歳以上の世帯員のいる核家族世帯数」と「高齢単身世帯」を足し合わせた世帯数を指す）に占める高齢単身世帯の割合が42.3％と、政令指定都市20都市の中でも2番目に高く、ひとりで暮らす認知症の人が直面している多様な生活課題に対応していく必要がある。

認知症の人が多数となる社会は、人の長寿命化に伴う必然である。そのため、「みんなの認知症」と認識して、疾病や障害を治療することで問題解決を図る「医学モデル」だけでなく、社会の関係性や環境を変える「社会モデル」からのアプローチも必要である。これら多様な生活課題に対応するには、「支援するーされる」の関係に基づく対処では限界がある。その際に地域レベルで解決すべき社会課題は、支援者・企業等と認知症に関わる人との対話に基づく新しいサービス創造の基盤づくりである。既存調査（国際大学 グローバル・コミュニケーション・センター/認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ「認知症の人にやさしいまちづくりガイド」）によると、認知症の人の活動交流が減る理由の大部分に、企業のサービスや活動が関わっている。

こうした課題意識のもと、福岡市では、認知症フレンドリーシティを目指しており、認知症の人と一般企業も含めた多様なサービス提供者による共創の場の検討が進められている。このような多面的な課題に、多様な関係者とともに取り組む上で、既存の認知症に対する捉え方を越えて共創に取り組める基盤が必要となる。しかし、医療福祉の文脈を越えて認知症に関する共創を実現するための効果的な方法論・場の在り方といった仕組みが確立されていない。

そこで、本研究開発プロジェクトを通じて、認知症を包摂する新しい社会モデルと、それを推進するプロセス技術（方法論、場等）を構築することで、ひいては高齢者が暮らしやすい社会づくりに役立つ共創のためのシナリオを確立・普及したいと考える。

本プロジェクトが目指すSDGs達成のビジョンは、「支援するーされる」という関係に固定される傾向がある認知症対処社会から脱却し、認知症の人を含めて自由に発言（表現）し合い、多様な人と共創できる社会を「認知症包摂型社会」の実現を目指すことである。この認知症包摂型社会は、具体的な課題（例えば認知症の人の外出困難や就労等）の解決を目指そうとするとき、常にその根底に潜在している認知症を取りまく関係性の課題に着目する。こうした関係の刷新は「みんなの認知症」の視点でむしろ課題を新しい視点から見直し、より本質的な課題解決策を多様な関係者で共創していく基盤となる。そうした社会のあり方が、最終的に認知症フレンドリーなまちの実現を促していくものと考える。

さらに今回はここに共創的アート活動という表現手段を取り入れ、凝り固まった関係

性を崩し、弱者とされがちな認知症の人をエンパワメントすることを目指している点は、認知症当事者を含めた多様な関係者側の意識変革を促し得る。

（２）研究開発プロジェクト全体の目標

○ 認知症当事者を含めて自由に発言（表現）し合い、多様な人たちと共創できる関係性を備えた社会を「認知症包摂型社会モデル」として設定する。そして、本研究プロジェクトでは、その社会像の実現にむけて、多様な主体が新しい価値に基づくサービス等の共創ができるようにするためのプロセス技術（方法・行程・評価基準等）を明らかにして、それらを地域に実装していくためのシナリオを策定する。

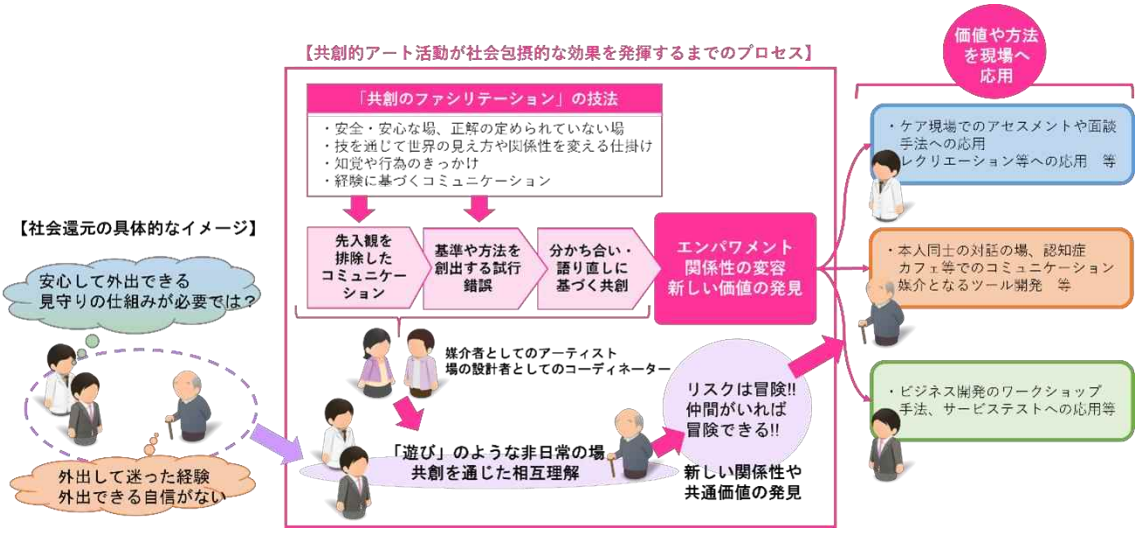
○ 認知症包摂型社会モデルを実現するうえで、検証すべき課題として「認知症にまつわる人と人との関係性」を設定する。認知症にかかわる課題解決の活動や製品・サービス開発は現状でも行われている。しかし、その現場では「認知症当事者は問題を抱えている」という前提認識による関係性からコミュニケーションが行われているために、当事者のエンパワメントにつながらず、かつ本質的な課題に基づかない解決策が創出されかねない。

○ 本プロジェクトでは、上記の課題に対応して、関係性の変容と新しい価値の共創を促進する技術シーズとして、共創的アート活動を組み込む。プロジェクトでは複数の共創的アート活動のトライアル実施を行うことで、認知症の人とその支援者等の間に起きる関係性や意識の変化や、その変化を及ぼす条件・要素を検証する。

○ 抽出された共創的アート活動の条件・要素を、認知症の人の関係する既存の現場へと応用する可能性試験を実施する。既存の現場となるフィールドとして、①認知症当事者参加の場、②ケアの場、③ビジネス開発の場、の3つを想定して、関係するステークホルダーとともに、新しい価値に基づくサービスの共創を試みる。

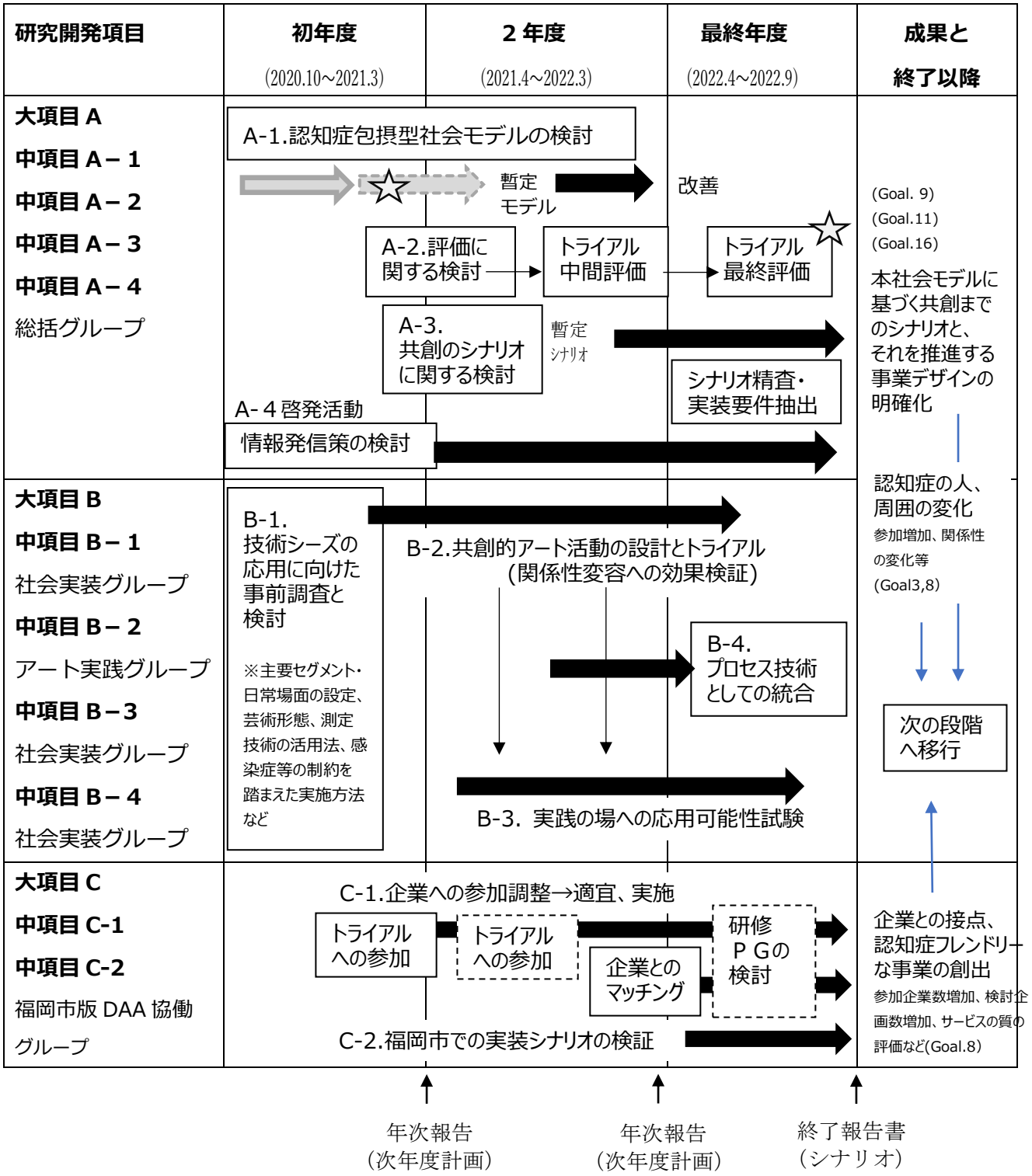
○ これらのトライアル活動及び現場への応用可能性試験を通じて、社会モデルに至るまでのシナリオ仮説の修正や、プロセス技術の明確化、それを実現していくための事業モデルの検討を行う。

○ 社会モデル、シナリオの具体化とともに、主要メンバーが持つ福岡県内のネットワーク、協力組織が持つ全国的なネットワークを活用した情報発信・交流を実施することで、他地域展開を行う。



２－２．実施内容・結果

（１）スケジュール



（２）各実施内容

令和3年度の到達点①：

・認知症包摂型社会モデル(仮説)、ならびに共創を促すプロセス技術の在り方の検討

実施項目1：運営ミーティング、関係者ミーティング（共創マネジメント検討会）

実施状況　：最終的なアウトプットである認知症を包摂した社会モデル、ならびに共創を促すプロセス技術の在り方を検討する機会を設けた。その中で、新型コロナウイルス感染症による影響で共創的アート活動のトライアルもままならない社会環境下に置かれたこともあり、コロナ禍でも実施可能な形態も含めて、医療・介護施設における共創的アート活動のトライアル実施に向けた検討が議論の中心となった。

実施項目2：ゲストを交えての研究会の開催

実施状況　：令和3年度のトライアル成果をもとに、2月に公開シンポジウムに合わせて、多様なステークホルダーを交えた研究会を開催し、実際の社会実装に至る展開可能性ならびにシナリオに必要な要素に関して、ゲストを交えて議論を行った。

令和3年度の到達点②：

・共創的アート活動のトライアルの実施

実施項目1：共創的アートに関する検討会の実施

実施内容　：医療介護施設をフィールドとした「共創的アート活動」に関するトライアルを企画・実施した。共創的アート活動を通じて引き起こされる関係性の変化を具体的に検証するために、重度認知症デイケア施設における共創的アート活動のプログラムマネジメント、アンケート・インタビュー等の評価設計などを検討した。トライアル実施後は、そこで生じた変化や反応を整理するべく、事後インタビューを行うなど、成果を整理した。

実施項目2：共創的アート活動の応用に向けた追加調査

実施内容　：福岡市でのトライアルに向け、前年度の調査を踏まえて、情報追加が必要と考えたアートマネジメント、評価の在り方、ならびに福岡市で展開する上での地元関係者（前年度オンライン体験会に参加された介護事業者、地元のアーティスト等）へのヒアリングを行った。

実施項目3：共創的アート活動のトライアル

実施内容　：前年度の成果と②-1での検討結果を踏まえて、認知症の人とその関係者とともに行う共創的アート活動のトライアルを、重度認知症デイケア施設をフィールドに展開した。トライアルは1か月の期間、認知症当事者、医療介護スタッフの参加のもと、計3回の共創的アートワークショップを開催した。各回の中で振り返りを集団で図り、参加者の声や前後の反応等を加味しながら、即興演劇で使用する物品、取り上げる場面など、改善を重ねながら実施した。定性的、定量的なデータから成果を整理する中で、介護とアートワークショップの共通点と相違点が明らかになった。また、ワー

クショップ単体がもたらす効果だけでなく、企画から終了後までを含めた連続プログラムとして設計することの重要性も示唆された。

実施項目 4：実践の場への応用可能性試験に向けた企画検討
実施内容　：実践の場として、①認知症当事者参加の場、②ケアの場、③ビジネス開発の場の 3 つを想定しており、研究事業機関内にビジネス関係者を交えた可能性試験の実施をすることを検討したが、実施事項 3「共創的アート活動のトライアル」の成果を踏まえ、医療介護現場向けに目的を設定した応用可能性試験を図ることが重要であるものと考え、一足飛びに①・③の現場での活動を企画することを控えることとした。

前年度の到達点③：
・企業を中心とした多様なステークホルダーとの接点づくり
実施項目1：企業向け企画の検討
実施内容　：認知症フレンドリーな商品、サービス作りへの関心が高まる福岡市において、企業に対する働きかけ方、接点の持ち方を検討した。
実施項目2：啓発活動
実施内容　：多様な関係者が持つネットワーク、情報発信の機会を活用して、認知症包摂社会、ならびに認知症フレンドリー社会という目指すビジョンの啓発活動を検討した。多様な関係者が持つネットワーク、情報発信の機会を活用して、認知症包摂社会、ならびに認知症フレンドリー社会という目指すビジョンの啓発活動を検討した。令和3年度2月には「共創するケア｜互いの〈できる〉がひらくとき」と題したタイトルで、広く公開シンポジウムを開催し、②-4で上げたコンセプトを広く周知する機会を設けた。

（３）成果

令和3年度の到達点①：

・認知症包摂型社会モデル(仮説)、ならびに共創を促すプロセス技術の在り方の検討
（目標）認知症包摂型の社会モデル、共創を促すプロセス技術の具体化

実施項目1：運営ミーティング、関係者ミーティング（共創マネジメント検討会）
成　果　　：

該当年度は、共創的アート活動トライアルの進捗を踏まえながら、社会モデルの捉えなおし、ならびにプロセス技術としての実装プログラムの検討を行った。

社会モデルに関しては、認知症包摂というコンセプトをより大きな認知症フレンドリー社会モデルの中に内包される重要な要素の一つであるものと捕らえ直した。すなわち認知症フレンドリーな地域、ケア、モノ・サービスを共創するために、認知症の人が多様な主体とともに物事を変えていける力を引き出せる関係性を指すものとし、周囲による捉え方、関係の作り方を変えることが第一に重要であるものと整理した。

平行して、実装プログラムに関しては、共創を促すための基盤となる関係性の変化を促す仕組みとなるよう具体化を図った。前述の認知症包摂の捉え方の再整理にも紐づけながら、医療介護施設におけるトライアルの成果を踏まえて、共創的アート活動を通じた「高齢者の潜在能力を高めるコミュニケーション」を身に付けるワークショップ研修など、人材育成・組織開発プログラムを中心に検討することとした。加えて、実装に向けた展開可能性に向けた議論ポイントをプロジェクト関係者で精査し、表3-1のように整理した。

表3-1. プロセス技術として実装に向けた検討項目

１）人材育成・組織開発としてのプログラム化
• 高齢者の潜在能力を高めるコミュニケーションを身に着けるＷＳ研修の検討 • トライアルの結果から、共通するプログラム要素を抽出する ➢ スタッフのみのプログラムと、認知症高齢者と複数のスタッフが一緒に行うプログラムとしての整理 ➢ 施設状況、参加者の認知機能状況に合わせたプログラム検討ポイント 等 • 意識的な振り返りから日常のケアの場との接続を図り、互いの＜できる＞を　引き出すプログラム
２）連続プログラム設計のためのガイドラインの作成
• アーティスト、施設、コーディネーター３者によるプログラム構築のプロセスの中で重要なポイントを整理して、モデルとなるガイドラインを作成する。 • それぞれに参加する際のポイントを明確に提示し、適切な参加を促す。
３）質的データ、数値データ、動画解析等を用いた包括的な評価手法の検討

実施項目2：ゲストを交えての研究会の開催
成　果　　：

プロジェクト内での検討状況に対して意見を集め、ブラッシュアップすることを目的に、多様なステークホルダーを招待し、研究会を開催した。2月公開シンポジウムに合わせて実施し、プロジェクトでのトライアル状況はシンポジウム内で報告し、研究会ではその実装方法に関する意見交換として、研究会テーマとしては、共創的アート活動自体への感想（可能性・課題等）に加えて、以下の2点を設定して議論した。

1. 共創的アート活動を活用した医療介護施設向けの人材育成・組織開発の研修プログラムとして展開する場合、医療介護施設・アート側双方にうまく受け入れてもらうにはどうしたらよいか
2. 企業等、ほかの場面やステークホルダーを含めた地域社会への接続について、どのようなものが考えられるか（アイデアについて意見交換）

参加者はシンポジウム登壇者、プロジェクト実施者・協力者に加えて、社会福祉法人事務長、アート関係の中間支援まで担う非営利活動法人理事、アーティスト（結実企画）、JST関係者にも参加をいただき、福祉・芸術の双方の視点から意見が出されるように調整することができた。実践者に関しては福祉の現場でアート活動を実践されている方で実施した。「共創的アーチの定義づけ」「当事者の参加の仕方（巻き込み方）」「プログラムとしての在り方」「日常とのつなげ方」等の観点から意見交換を行った。

なお、議論は同時進行で可視化できるよう、オンラインホワイトボードアプリであるmiroを活用し、途中で議論の振り返りに活用した（図3-1，3-2 参照）。

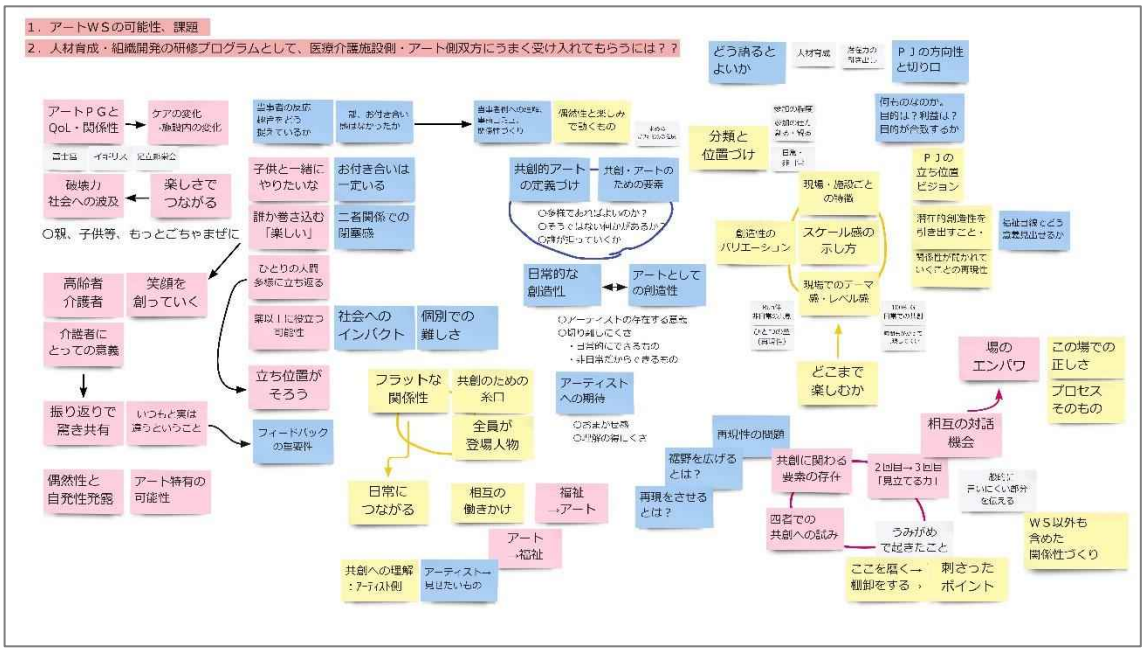


図3-1．意見交換結果（1）感想、並びに研修プログラムとしての展開について

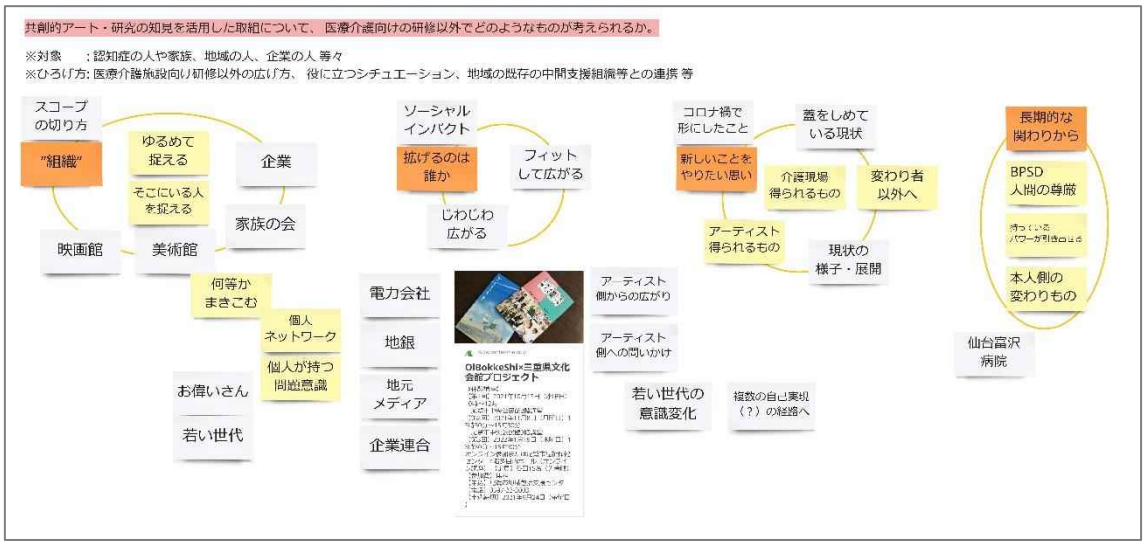


図3-2. 意見交換結果（2）他の展開アイデアについて

令和3年度の到達点②：

・共創的アート活動のトライアルの実施

（目標）トライアルを通じたプロセスの確認、ならびに効果検証

実施項目1：共創的アートに関する検討会

成　果　　：

医療介護施設における「共創的アート活動」のトライアル（実施事項3）に向け、実施先の決定から企画内容の精査、アーティスト・施設側関係者との打合せ、効果検証に関する検討まで実施した。並行して、企画づくりを進めるうえで先行事例から学ぶことを目的とした追加調査を行った（実施事項2）。実施事項2・3は、施設におけるトライアルを充実させながらその成果を検証するアクションリサーチとして、総合的にデザインし、必要性に合わせて絶えず検討を重ねる形をとった。

本年度のトライアルでは、関係性を変えることを目的とした本PJの趣旨と照らし合わせて、認知症高齢者へのアートの効果以上に、医療介護専門職を交えた非日常的なアートWSと日常にあるケアの循環に焦点を当てた（図3-3）。そこで、研究課題として、共創的アートを認知症高齢者とともに医療福祉の現場で展開するうえで、①アートWSのどのような要素がケアに変化をもたらすか、②どのようなプログラムにすることが効果的か、を検証することを主目的とした研究デザインを組むこととした。

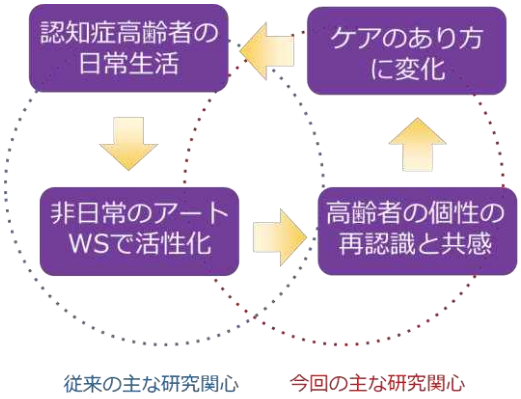


図3-3. 本年度トライアルの研究対象

実施先については、当初、令和2年度に実施したオンライン体験会に参加した介護事業所にて、追加調査（実施事項2）で古賀弥生氏から紹介された即興演劇を行う演劇人チームである結実企画（むすびきかく）によるワークショップを行う形で準備を進めていた。しかし、新型コロナウイルスへの予防対応で当該施設の受け入れが困難となり、研究代表者が所属する医療法人における重度認知症デイケアで実施することに変更した。施設側関係者との意見交換を行い、引き続き、結実企画（むすびきかく）の即興演劇を取り入れることに合意した。

デイケアうみがめ

- **重度認知症の方を対象とした通所施設**（福岡市東区）
- 音楽療法、ヨガなどのレクリエーションを取り入れており、コロナ禍では集団精神療法の取組みを始めた

即興演劇を実施

- 場面設定等のみで台本を用意せずに、即興的な演技手法を用いて、参加者が自発的に演じる形式の演劇

結実企画（むすびきかく）

- 福岡県を中心に、幅広い年齢を対象として、演劇の手法を用いた表現活動やコミュニケーション学習の講師として活躍する**演劇人のチーム**
- **認知症高齢者との演劇ワークショップ経験・実績が豊富**

図3-4. 令和3年度トライアル実施施設と協力アーティスト

検討会では、トライアル（実施事項3）の企画・実施を通じて、効果検証を進めるとともに、重要なコンセプトやマネジメント項目の言語化を進めた。特に、非日常的な共創的アートの体験を通じて、認知症高齢者の潜在的な反応や記憶、ならびに今回は「見立てる力（目の前にないものに対して自身の経験などから想像力を働かせ、働きかけることのできる力）」を引き出すこと、そうした反応に触れることで医療介護従事者側にとって新しい気づきを促し得ることなどの知見が得られた。同時に、こうした変化を日常における変化に如何につなげるか、という点はより精緻な検討が必要な課題として残った。より詳細な検討内容は、実施事項（2）（3）にて述べる。

実施項目2：共創的アート活動の応用に向けた追加調査
成　果　：
トライアルの効果を高めるために、先行する取組みから連続プログラムとして企画・運営をする上でのポイント、評価に関する視点を調査した。令和2年度における調査と合わせて、最終的に13組18人から介護現場の現状、アートWSの実施経験、評価の方法などについてインタビュー調査を行うことができた（表3-2）。インタビューは、事前の文献調査、各対象者に合わせた質問項目の作成、インタビューの実施（1～2時間、zoom meetingを活用）という流れで進めた。

表3-2. 令和3年度実施ヒアリング協力者リスト　（順不同・敬称略）

カテゴリー	名前・所属・肩書等　※所属などは当時
介護関係者	小規模多機能型居宅介護施設･みのり荘 社会福祉法人　足立邦栄会 （アートWSと介護人材の育成を連携して実施）
コーディネーター	NPO法人芸術資源開発機構、アーツアライブ、県外の自治体文化課･美術館、 アートサポートふくおか等
研究者	仙台富沢病院 同志社女子大学　現代社会学部　教授

インタビュー成果をもとに、 ①共創的アート活動が関係性の変化に与える効果、②アートマネジメントのありかた（活動の継続と展開のために）という２つのポイントと③検証したい「変化」の項目を整理し、④トライアルの狙いを具体化させた。

①共創的アート活動が関係性の変化に与える効果

- アートWSは、正解・不正解のない自由な表現の場であり、すべての参加者が対等な関係性になる
- アーティストの働きかけによって、それぞれの感情や表現、経験等、様々な発露が肯定され、参加者の潜在性や生きる力、自己肯定感、必要とされている感覚を引き出す。また、そこでのふれあいや声掛けがケアのヒントになることもある。
- 自分自身や相手の変化・個性を感じ取ることで、目の前の人と向き合う機会になり、日常の捉え方が変わる

②アートマネジメントのありかた（活動の継続と展開のために）

- 介護施設等でアート活動を実施し、日常における関係性の変化や活動の継続につなげるためには、施設長、及び参加する職員の理解が必要不可欠。
- そのため、プログラムにおいては、以下の一連の流れを組み込むことが重要。
  1. 介護者・スタッフ向けアートWSを実施し、内容や大切なことを経験的に共有
  2. 認知症の方と介護者が参加してアートWSを実施
  3. WS後には必ずふりかえりの時間を設定

③検証したい「変化」の項目

日常的に認知症の方に接する専門職や家族

- 認知症当事者の「今」を捉える 観察力・傾聴力
- 認知症当事者による表現や感情の発露への 即興力、対応力、受容力
- ケアや接し方の「質」の変化＝ “あそび”の感覚 の定着

認知症当事者

- 自らの発言や振る舞いへの 尊厳、自己肯定感
- 非日常的状況から引き出される 過去の経験や記憶
- 答えのない状況を他者と共有することによる 想像力、共創力
  （自己発信と他者受信、コミュニケーションがひらかれる）

専門職や家族、認知症当事者のあいだ

- コミュニケーションやふるまいの変化
- 関係性の変化（WSの参加者同士、専門職-認知症当事者、家族-認知症当事者）
- 専門職の仕事に対する意欲の変化、認知症当事者の社会参加、生きる意欲の変化

④トライアルの狙い

【狙い　】職員と利用者とが観察力・即興的な対応力を発揮しながら、「なんでもあり」という許容のムード（あそびの感覚）の中で、普段見えづらい個々人の特性・個性がにじみ出ることによって、普段の関係性（当事者同士、職員-当事者間）の変容を促す。

【WS内容】演劇的手法により参加者の「想像力」や「身体表現」を引き出し、参加者全員で即興的に物語を共創する。毎WS実施後、参加者でふりかえりを行う。

実施項目3：共創的アート活動のトライアル

成　果

実施項目2の整理した成果を踏まえて、プログラムデザインを行った（図3-5）。ワークショップは認知症の人と施設スタッフが同じ参加者として混ざり合う形をとり、具体的な内容は施設側の状況・意向を踏まえながら、対話を重ねる中で組み立てた。また、効果検証については、施設の特性上、重度認知症の方の参加となるため、アンケート、ヒアリング等は参加した施設スタッフを対象とし、認知症の人の様子なども含めて聞き取る形とした。また、参加者・家族の同意を得たうえでWS時の音声録音、動画撮影を行い、WS内に現れる特徴的な出来事に関する質的分析と映像解析の導入に向けた予備分析に向けたデータを収集した(表3-3)。なお、COVID-19対策として、外部からの人数を制限し（アーティスト2名、研究チーム2名）、抗原検査・PCR検査後、実施した。

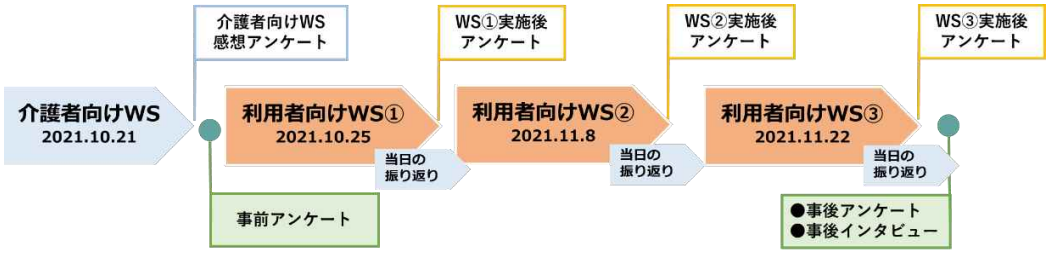


図3-5.　令和3年度トライアルにおける活動デザイン

表3-3.　トライアルの研究デザイン

1．アンケート調査
・介護者の意識や行動の変化を量と質の両方で捉え、傾向把握を目的として実施. ・各4回のワークショップ、ならびに一連のワークショップ前後の計6回. ・事後インタビュー時にも、各回答者の傾向を把握する上で活用.
2．インタビュー
・介護者個人の変化を聞き取り、変化のプロセス（因果関係）を検討するために実施. ・各ワークショップ後、参加したスタッフ（少人数）での振り返りからも記録. ・プログラム後にフォーカスグループ形式で、2名ずつ、計4名に協力をお願い.
3．映像分析
・WS内に現れる特徴的な出来事を分析し、客観的に提示できる情報収集. ・定点カメラ3台、手持ちカメラ1台、小型ICレコーダー4台 ・全体＋特徴的な場面の相互行為分析 ・行動・表情動画分析の独自アプリを用いた量的分析に向けた定性的な予備分析

以下、具体的な成果（明らかになったこと）を、プロセスとアウトプット、そしてアウトカムに分けて、提示する。

【プロセス】プログラム進行に合わせた企画・運営マネジメント

本トライアルを進めるうえで、以下の図3-6のような流れで企画の具体化を進めた。その際、プロジェクトメンバーは、異なる作法・思考法を持つアーティストと施設スタッフをつなぐコーディネーター（通訳者）として、アーティストと介護現場の間のコミュニケーションを促した。主な調整内容としては、アーティストの設定、事前準備（実施環境の整備・要望に沿った企画づくり）、各回のWS内容、毎回の振り返りを主とした。全3回のWSにおける即興演劇内容については、プログラム開始前に決めるのではなく、各WS開催時の様子を踏まえて、次の回の内容を検討する形式をとった。そのため、各WS後の振り返りで参加した施設側スタッフの感想・意見を適宜反映させた。また、プログラム期間中に希望や戸惑いが表出したタイミングがあり、臨時のミーティングも開催した。今回のトライアルでは、第2回WS後に施設側参加スタッフから戸惑い・希望が提示された際にその内容を深掘りした上で、アーティストと共有、第3回WS内容へと反映させた。このように、参加者の声や前後の反応等を加味しながら、即興演劇の内容、使用する物品、取り上げる場面など、改善を重ねることで効果を高められるものと考えられる。

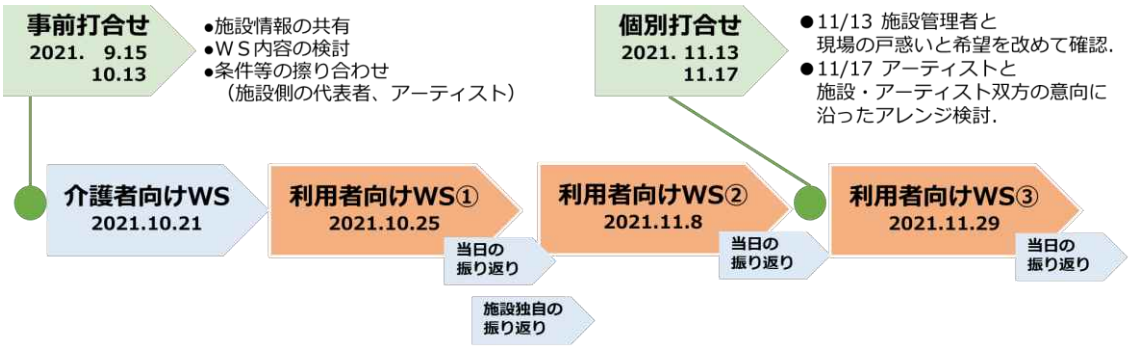


図3-6. 共創的アート活動ＷＳプログラムのマネジメントの実際

【アウトプット】全3回ワークショップの開催状況

ワークショップ概要としては以下の通りになった。なお、第3回WSは11月22日開催予定としていたが、関係者の体調不良を鑑み、当初予定から日程を変更している。また、プロジェクトメンバーによる振り返りの中で、各WSが以下のような段階で進んだものと整理した。特に、第2回のチャレンジが噛み合わなさの体感につながり、結果的に第3回におけるより身近なテーマ設定、共創の雰囲気づくりにつながったものと解釈した。

・第1回WS＝「演劇の場への誘い」
・第2回WS＝「パーソナルな表現へのアプローチ」
・第3回WS＝「三者による表現の場の共創」

●日時　介護者向けWS　　10月21日㈭ 17時半～19時
　　利用者向けWS　　第1回=10月25日㈪、第2回=11月8日㈪、第3回11月29日㈪
　　いずれも14時　～15時

●参加者　・デイケアうみがめ　利用者20～25人、介護者6～13人※シフトや体調で変動
　　・結実企画　講師2名、研究チームスタッフ2名

●内容

介護者向けWS

- 利用者向けWS実施の前に、**介護者のみで**実際のWSプログラムを体験
- 介護者にWSを楽しんでいただくと同時に、利用者と実施する際の**プログラムの検討**や、WS中の**サポートの仕方を確認**した

プログラム	● 手遊び ● ぬいぐるみを使ったコミュニケーション ● 日常の音を聞いて記憶を連想
利用者向けWSへの課題	● 耳の聞こえづらい利用者には、音を聞いて記憶を連想するのが難しい ● 話者の声は大きめに ● ゆっくりとしたペースで実施したほうがよい

利用者向けWS　第１回：演劇の場へのいざない

プログラム	● 講師が「わたしもあなたも俳優です」と伝える **→演劇的な場の設定** ● 手遊び／隣の人と目を合わせ＆タッチを回す／講師による芝居「好きよ」 **→雰囲気がほぐれ、演劇に安心して参加できる場が整う** ● ぬいぐるみになりきって、即興的な会話 **→自発的な創造的表現が促される**
次回WSへの課題	● 手を動かすのが難しい方への配慮 ● 席配置の工夫（反応の大きい方、そうでない方のバランス）

利用者向けWS　第２回：パーソナルな表現へのアプローチ

プログラム	● 呼ばれたい名前で名札を作り、お名前コールで、一人ひとりに注目が集まる **→集団の前で、自発的な表現を促す** ● リトミックスカーフを使い、自由にポーズをとる **→普段とは異なる、パーソナルな表現を促す**
次回WSへの課題	● アーティストの問いかけと、利用者の反応が噛み合わず、利用者・介護者ともに展開についていけない場面があった →この場では、スカーフが利用者の記憶や想像力を刺激しなかった

利用者向けWS	第３回：三者による表現の場の共創

工夫点	● 手ぬぐいや作務衣、鈴など馴染みのある小道具を使い、記憶を刺激する ● 「〇〇を教えて」「だれか手伝って」と呼びかけ、利用者の発言や自発的行動を促す
プログラム	● 呼ばれたい名前で名札を作る ● 年末の行事（もちつき、黒豆づくりなど）の身近なテーマで、見立ての演技 **→過去の記憶が呼び起こされ、演劇的な場で過去と現在の時間が混ざり合い、生き生きとした自分を表現できる** **→利用者・介護者・アーティスト全員で、その場を共創する** ● 最後に一人ひとりの活躍をたたえ、お名前コール **→介護施設内のコミュニティにおける自分の居場所を見つける**

【アウトプット】参加スタッフを対象とした調査結果から

施設スタッフの視点という制限はあるが、各タイミングで実施したアンケート・振り返りの内容と事後インタビューの内容を活用し、定性データと定量データを組み合わせたうえで、「①介護者から見た利用者にとっての意義」「②医療・介護現場の職員にとっての意義」「③アートWSに対する課題と不安」を整理した。また、統計分析についてはサンプル（N=11）が少なく、事前事後比較による参考値となる。

※ 選択した点数に重みづけをせずに、ポイントとして換算し、平均点を算出．説明前アンケート（以下初回）、説明後・実施前アンケート（以下事前）、3回実施後アンケート（以下事後）を比較

① 介護者から見た利用者にとっての意義

「Q.認知症の方にとって、アートワークショップを体験することは有効だと思いますか（全くそう思わない1～非常にそう思う10：〇は1つ）」という質問への回答を分析対象としたところ、プログラム終了後に、過半数の参加者が有効だと思う方向に変化していた（図3-7．平均で+2.55）。

そこで、振り返りや事後インタビューで見られた発言を確認すると、具体的に以下の3点への言及が見られた。

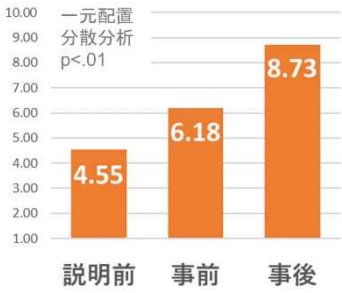


図3-7.
利用者にとっての意義

1）潜在的能力が発揮できる

- 非日常的な活動で、反応が鮮やかに出ていた。集団精神療法・回想法とは違う反応が出ていた。
- そこにないものに対しても、利用者が適応・反応されようとしている。

２）コミュニケーション意欲が高まる

- 失語症の方が積極的にコミュニケーションをとろうとしていた。普段は遠慮がち。
- 言語を介さずとも表出できる活動だったので、言語理解が難しい方も周囲の助けをかりながら、表現ができていたのではないか。

３）日常生活に前向きになる

- 気分が前向きになったためか、その後のリハビリがしやすくなった方がいた。

②医療・介護現場の職員にとっての意義

「Q.認知症の方のケアを担う医療・介護現場の職員にとって、アートワークショップを体験することは有効だと思いますか（全くそう思わない1～非常にそう思う10：○は1つ）」という質問への回答を分析対象としたところ、プログラム終了後に、過半数の参加者が有効だと思う方向に変化していた（図3-8. 平均で+1.91）。

そこで、振り返りや事後インタビューで見られた発言を確認すると、具体的に以下の3点への言及が見られた。

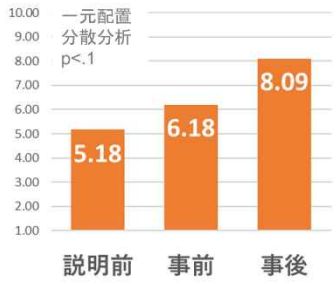


図3-8.
職員にとっての意義

１）利用者の持つ新たな一面と出会える

- あだ名で呼び合えることで違う反応が見られて、すごい。
- その人を知る貴重な発見ができ、価値がある。
- 親近感が湧いたり、身近に感じることができた。

２）介護者としての気づきがある

- この人にはこういう時にこういうコミュニケーションを取ることで良い反応を引き出せる、といった可能性を感じる。
- 目的が掴めず戸惑いも感じながら参加する中で、新たな一面を引き出すことへの意識が高くなった。

３）非日常的な時間を楽しめる

- 自身も笑い、普段の活動と比較して、笑顔が多いように感じられた。

③アートWSに対する課題と不安

「Q.課題や不安を感じますか。（全く感じない10～非常に感じる1：○は1つ）」という質問への回答を分析対象としたところ、プログラム終了後に、過半数の参加者が課題・不安を抱くように変化していた（図3-9. 平均で-1.91）。

そこで、振り返りや事後インタビューで見られた発言を確認すると、具体的に以下の3点への言及が見られた。

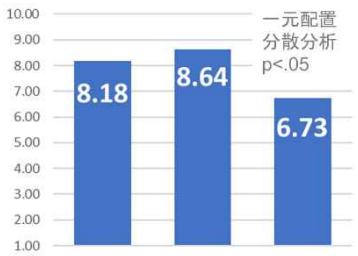


図3-9. 課題と不安

１）継続的に取り組むことの重要性

- 反応を引き出すには回数が少ない。3回目で主体的な動きが出てきた。
- 単発ではなく継続。蓄積されるものがある。続くから比較することができる。

２）利用者の多様な反応への対応

- 重度になるほどサポートするスタッフの人員・関わり方が充分でないと置いていかれる。
- 断片的な言葉、ちょっとした動きから想像力を働かせて介護職が関わることで引き出せるものがある
- 受け入れ先の施設によって効果の差が出そう。

３）介護能力に対する自信の揺らぎ

- 集団が新しいものを受け入れたときの防衛的な反応もありうる。
- 普段自分たちがやろうとしていることの中核に近づいている部分があるかもしれない

以上、プロセス・アウトプット・アウトカムの観点から、定性的、定量的なデータに基づき成果を整理する中で、介護とアートワークショップの親和性と相違を言語化した。また、実際のプロセスと照らし合わせる中で、ワークショップ単体がもたらす効果だけでなく、企画から終了後までを含めた連続プログラムとして設計すること、また継続性を持たせること等の重要性も示唆された。

また、共創的アート活動WSの様子を録画し映像について、試行的な映像分析を行った。手首の移動量や両肩の距離などから、拍手・やり取り・ふるまい・横を向く動作などの活動量を把握できることは確認できた。本トライアルでの映像は会場全体の雰囲気をとらえることを優先したため、次年度の活動では撮影対象を絞り込み、場の変化を読み解くうえで計測すべきポイント（捉えるべき動作・活動等）を探ることに取り組む。特に、認知症中重度以降、外部から捉えやすい言語表現や表情等の感情表現が乏しくなる中でも、反応を読み取るための指標になるものと考える。

実施項目4：実践の場への応用可能性試験に向けた企画検討

成　果　：

本プロジェクトでは当初、医療介護現場以外にも、①認知症当事者参加の場、②ケアの場、③ビジネス開発の場の3つを想定しており、研究事業機関内にビジネス関係者を交えた可能性試験の実施をする方向で検討していた。

しかし、前年度のトライアルを通して、共創的アート活動を導入した場が多様な関係者に新たな気づきをもたらすものとなるためにも、一足飛びにケアの現場以外に波及させるのではなく、医療・介護施設等のケアの場における共創的アート導入のモデル化が重要であることが見えてきた。

そこで、多様な主体が参加できるコミュニケーションの基盤として、ケアの場における共創的アート活動を社会実装させるプログラムとしての在り方を検討した。結果的に、波及に向けて「認知症高齢者の潜在能力を引き出すコミュニケーション」「共創するケア」等のコンセプトによる人材育成パッケージを重視することとし、次年度は明確な目的設定をもとにした形で、可能性試験に位置付けることにした（トライアルでは人材育成を明確な目的としていなかった）。

令和3年度の到達点③：

・企業を中心とした多様なステークホルダーとの接点づくり

（目標）多様な主体に向けた広報・啓発

実施項目1：企業向け企画の検討

実施項目2：啓発活動

成　果　　：

到達点②実施事項4であげたように対象の焦点化を図ったため、企業に対する働きかけに限定せず、より広い範囲での啓発活動を企図したオンラインシンポジウムを実施した。多様な関係者が持つネットワークを活用して、認知症を包摂した地域社会、ならびに認知症フレンドリー社会という目指すビジョンを目指すうえで、共創的アート活動がどのような位置づけのもと、どうような効果を持ちうるのか、トライアル成果の発信を中心とした企画として。令和3年度2月には「共創するケア｜互いの〈できる〉がひらくとき」と題したタイトルで、オンラインシンポジウムを開催した。内容としては、認知症当事者と介護者のあいだに立ち起こる「共創」的コミュニケーションに焦点を当て、本年度の医療介護施設での即興演劇を用いた活動トライアル成果を報告するとともに、関連事例として『旅のことば―認知症とともによりよく生きるためのヒント』を取り上げ、これからの認知症当事者とのコミュニケーションについてのパネルディスカッションを実施した。主に、認知症の方の潜在能力を引き出すコミュニケーションを理解し、身につけることに関心を持つ人を対象（認知症介護に関わる関係者や研究者や、認知症に関連するサービス開発に携わる関係者やアーティスト など）とした。広く「認知症当事者とのコミュニケーション」をテーマとしたパネルディスカッションでは、重要なポイント、キーワードとして「その設計自体をともに創り上げていくこと」「揺れる機会と日常への連なり」「生き抜くための表現活動を通してそれぞれの豊かさにつながる」「互いの出会い直し、自分との出会い直し」等、多様なコメントが提示された。

（４）当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

令和3年度は医療介護施設における共創的アート活動トライアルを通じて、現場実践を通した効果検証を含め、協働関係を強化し、企画・運営のマネジメントプロセスを可視化させることができた。

こうした成果を振り返り、共創的な社会をつくるという長期的なビジョンを掲げてきたが、これまでの成果の積み上げ式で捉えると、多様な現場変容につなげることにはまだ溝があるものと判断した。一方で、医療介護という具体的な現場課題にアプローチしながら、周囲の考え方、目線を変えることに注力する必要性を捉えることができた。短期・中期的には、ターゲットを広義のケアの現場（医療介護施設、地域の集いの場等）に絞ることが重要と考えている。また、そうした現場における捉え方、関係の在り方を変えることで、企業などの広く多様な主体を巻き込む場、機械の創出につながるものと考える。

そこで、令和4年度は、まずは医療介護施設に対するアプローチを具体化させ、社会実装プログラムとしての可能性試験を行うこととした。その成果をもとに、具体的な事業化の可能性を検討する。

２－３．会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2021年 5月6日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・令和３年度の具体的な進め方 ・役割分担の確認
2021年 6月10日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・トライアル調整の検討 ・スケジュール確認
2021年 6月24日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・効果検証の方法、同意取得に関する検討
2021年 7月7日	共創的アート活動 検討会	ZOOM Meeting	・トライアル先候補施設側関係者との打合せ
2021年 7月8日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・トライアル準備状況の共有 ・社会モデルの組み立て方の検討
2021年 7月19日	ブレスト	ZOOM Meeting	・目指す社会像の再確認 ・プロセス技術としての整理
2021年 7月30日	マネジメント会議	ZOOM Meeting	・効果測定、実装・普及に向けた社会資源や人材に関する検討
2021年 8月8日	地域活動参加	福岡県 筑紫野市	・認知症に関する集い場へ訪問
2021年 8月11日	共創的アート活動 検討会	ZOOM Meeting	・アーティストとの打合せ
2021年 8月12日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・先々を見据えての プロセス整理ポイントの確認
2021年 8月13日	マネジメント会議	ZOOM Meeting	・JST戦略会議に向けた 論点整理
2021年 8月19日	JST戦略会議	ZOOM Meeting	・マネジメントグループとの 意見交換
2021年 8月26日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・トライアル先の変更について ・検討すべき論点整理
2021年 9月8日	共創的アート活動 検討会	ZOOM Meeting	・トライアル先の変更、およい 実施内容についての検討
2021年 9月9日	ブレスト ミーティング	ZOOM Meeting	・アート実施後の仕掛けと、 展開戦略に関するブレスト
2021年 9月15日	共創的アート活動 検討会	ZOOM Meeting	・アーティストとの打合せ
2021年 9月27日	ブレスト ミーティング	ZOOM Meeting	・具体的なテーマ設定の必要性に関する検討
2021年 9月30日	マネジメント会議	ZOOM Meeting	・ワークショップ評価の項目、 方法等に関する検討
2021年 10月4日	事前 ワークショップ	福岡クリエイティブビジネ	・プロジェクト関係者向け アートWS

		スセンター	
2021年 10月13日	共創的アート活動 検討会	ZOOM Meeting	・施設側関係者、アーティストとの打合せ
2021年 10月14日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・企業目線のストーリー検討 ・トライアル進捗の共有
2021年 10月21日	施設スタッフ向け アートＷＳ	デイケア うみがめ	・介護者のみでアートWS体験 ・利用者向けの課題対応の検討
2021年 10月25日	共創的アートＷＳ	デイケア うみがめ	・第1回 利用者向けワークショップ
2021年 10月28日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・トライアル進捗の共有 ・評価分析に関する検討
2021年 11月8日	共創的アートＷＳ	デイケア うみがめ	・第2回 利用者向けワークショップ
2021年 11月9日	マネジメント会議	ZOOM Meeting	・WEB戦略会議に向けた準備
2021年 11月9日	WEB戦略会議	ZOOM Meeting	・マネジメントグループと評価・プログラム化に向けた意見交換
2021年 11月13日	共創的アート活動 検討会	ZOOM Meeting	・施設側関係者との打合せ （現場の戸惑い・希望の提示）
2021年 11月17日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・トライアル進捗の共有 ・評価分析の分担確認
2021年 11月17日	共創的アート活動 検討会	ZOOM Meeting	・アーティストとの打合せ （現場の声への対応）
2021年 11月29日	共創的アートＷＳ	デイケア うみがめ	・第3回 利用者向けワークショップ
2021年 12月9日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・トライアルの振り返り ・シンポジウムの企画検討
2021年 12月23日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・評価分析の項目の再確認
2021年 12月24日	マネジメント会議	ZOOM Meeting	・トライアルの振り返り ・シンポジウムの企画検討
2022年 1月11日	マネジメント会議	ZOOM Meeting	・次年度計画に関して ・トライアルの評価について ・シンポジウムの企画検討
2022年 1月13日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・次の共創的アート活動について ・トライアルの評価について ・シンポジウム準備の進捗共有
2022年 1月20日	マネジメント会議	ZOOM Meeting	・映像分析に関する意見交換
2022年 1月27日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・次年度計画書の検討 ・シンポジウム準備の進捗共有

			・研究会の企画検討
2022年 2月10日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・シンポジウム準備の確認 ・次年度への検討事項確認
2022年 2月16,18日	シンポジウム 事前ミーティング	ZOOM Meeting	・シンポジウム資料の確認 ・研究会テーマの事前ブレスト
2022年 2月20日	シンポジウム	ZOOM Meeting	・共創するケアの開催 ・研究会の開催
2022年 3月3日	マネジメント会議	ZOOM Meeting	・活動のモデル化の検討 ・今後の展開について議論
2022年 3月11日	マネジメント会議	ZOOM Meeting	・映像分析に関する意見交換
2022年 3月24日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・可能性試験に向けた検討 ・次年度への検討事項確認

３．研究開発成果の活用・展開に向けた状況

令和3年度終了時点までに、トライアル検証を踏まえて活用・展開に向けたプログラム化の検討を進めた。次年度以降、社会実装プログラムとしての可能性試験を図る予定としている。

４．研究開発実施体制

（１） 総括グループ

グループリーダー：内田直樹（医療法人すずらん会たろうクリニック　院長）
役割：認知症包摂に基づく新しい社会モデル、および共創のシナリオ創出
概要：認知症の人を含めて自由に発言（表現）し合い、多様な人と共創できる社会を「認知症包摂型社会」と捉え、そのモデルの具体化を図り、そこで刷新された認知症に関する社会関係に基づいた「共創に向けたシナリオ」の作成、評価、啓蒙を図る。

（２）プロセス技術の検討・実装グループ（社会実装グループ）

グループリーダー：長島洋介（ラボラトリオ株式会社　マネージャー）
役割：関係性の変容と新しい価値の共創を促進する仕掛け（プロセス技術）の可能性試験と開発
概要：認知症包摂型社会モデルのビジョンに則り、関係性の変容と新しい価値の共創を促進するために、技術シーズとしての共創的アートおよび動画解析技術による応用行動分析マネジメントを組み込んだ実践を企画・実施し、福岡市にて可能性試験を行う。その際、既存の現場となる①認知症当事者参加の場、②ケアの場、③ビジネス開発の場、の3つの出口を想定する。また、これらの可能性試験を通して、関係性の変化を及ぼす条件・要素を抽出して、他地域でも展開可能なプロセス技術を開発する。

（３） 共創的アート実践グループ（アート実践グループ）

グループリーダー：中村美亜（九州大学大学院芸術工学研究院　准教授）
役割：共創的アートを活用した地域実践の立案・実施と、効果検証
概要：関係性を刷新させる仕組みの軸とする共創的アート活動について、福岡市の認知症を取り巻く現状に適したアート形態・企画をトライアル的に実践し、関係性の変容を興す場を創出する。加えて、トライアルの場で生じた実際の関係性、考え方、価値観の変化に対して、応用行動分析マネジメント技術等を用いて、定性的、定量的に評価・検証することで、より適切な共創的アートの組み込み方を検討する。

（４） 福岡市版DAA協働グループ（ＤＡＡ協働グループ）

グループリーダー：笠井浩一（福岡市保健福祉局高齢社会部認知症支援課、課長）
役割：プロジェクト活動とDAA構想プラットフォームに参画する企業との調整
概要：福岡市版DAAにおいて構築してきたプラットフォームに参画する企業に対し

て、各種トライアルへの参加への調整を行い、必要に応じて、新しい考え・価値と企業の持つシーズとのマッチングを図る。

５．研究開発実施者

総括グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
内田 直樹	ウチダ ナオキ	医療法人すずらん会	たろうクリニック	院長
笠井 浩一	カサイ コウイチ	福岡市	保健福祉局高齢社会部認知症支援課	課長
中村 美亜	ナカムラ ミア	国立大学法人九州大学	大学院芸術工学研究院	准教授
長島 洋介	ナガシマ ヨウスケ	ラボラトリオ株式会社		マネージャー

プロセス技術の検討・実装グループ（社会実装グループ）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
長島 洋介	ナガシマ ヨウスケ	ラボラトリオ株式会社		マネージャー
南 伸太郎	ミナミ シンタロウ	ラボラトリオ株式会社		代表取締役
倉光 聡美	クラミツ サトミ	ラボラトリオ株式会社		アシスタント

共創的アート実践グループ（アート実践グループ）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
中村 美亜	ナカムラ ミア	国立大学法人九州大学	大学院芸術工学研究院	准教授
尾方 義人	オガタ ヨシト	国立大学法人九州大学	大学院芸術工学研究院	准教授
平原 早和子	ヒラバラ サワコ	国立大学法人九州大学	芸術工学部音響設計学科	学生
宮田 智史	ミヤタ サトシ	非営利活動法人ドネルモ		事務局長

櫻井 香那	サクライ カナ	非営利活動法人ドネルモ		職員
迫田 貴子	サコダ タカコ	非営利活動法人ドネルモ		職員
渡邊　めぐみ	ワタナベ　メグミ	非営利活動法人ドネルモ		職員
三好　剛平	ミヨシ　コウヘイ	非営利活動法人ドネルモ		理事

福岡市版DAA協働グループ（DAA協働グループ）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
笠井 浩一	カサイ コウイチ	福岡市	保健福祉局高齢社会部認知症支援課	課長
松村 むつみ	マツムラ ムツミ	福岡市	保健福祉局高齢社会部認知症支援課	代表取締役
久本 英二	ヒサモト　エイジ	福岡市	保健福祉局高齢社会部認知症支援課	活躍推進担当

６．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

６－１．シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2022年 2月20日	共創するケア｜互いの〈できる〉がひらくとき	本ＰＪ	zoom	申し込み 232名 参加者 約120名	[進行] 堀田聰子（慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科 教授） ▸当PJの概要紹介 –内田 直樹（医療法人すずらん会たろうクリニック院長） ▸事例１：当プロジェクトによる「共創的アート活動」についてのご報告 –中村美亜（九州大学大学院准教授／九州大学社会包摂デザイン・イニシアティブ） ▸事例２：『旅のことば：認知症とともによりよく生きるためのヒント』活用事例について –岡田誠（認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ〈DFJI〉共同代表理事／　富士通株式会社フィールド・イノベーション本部フィールド・イノベータ） ▸パネルディスカッション：両事例から探る認知症当事者とのコミュニケーションについて

６－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

（１）書籍、フリーペーパー、ＤＶＤ

・なし

（２）ウェブメディアの開設・運営

・なし

（３）学会以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

・なし

６－３．論文発表

（１）査読付き（　０　件）

●国内誌（　0　件）

●国際誌（　0　件）

（２）査読なし（　0　件）

６－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

（１）　招待講演（国内会議　0　件、国際会議　0　件）

（２）　口頭発表（国内会議　0　件、国際会議　0　件）

（３）　ポスター発表（国内会議　0　件、国際会議　0　件）

６－５．新聞報道・投稿、受賞等

（１）　新聞報道・投稿（　0　件）

（２）　受賞（　0　件）

（３）　その他（　0　件）

６－６．知財出願

（１）　国内出願（　0　件）